

研究参加者の恵みに導かれる看護の探求

青木 雅子（国際医療福祉大学 小田原保健医療学部）

私の「なぜ？」は先天性心疾患をもつ子どもの看護の中で始まった。思えば当初は自分の満足が主体の看護の探求だったが、研究参加者と大学院の学修の恵みのおかげで“病気を携えながら社会で生活している子ども”的もっと深くて複雑な探求へと変わった。「僕らは病院がすべてじゃないから」「そんなことよりもっと違うことのほうが大事なんじゃないかな」と話す研究参加者に、当初の「なぜ？」は覆された。彼らが語る真実によって現実の生々しさへと踏み出させられ、彼らの生き抜く必死さ、たくましさ、繊細さ、不思議さ、魅力を教えてもらった。病院で体験する一大イベントは、彼らにとって大切な一部であるとしてもそれが軸にはならず、病院から離れた世界で待った無しの勝負が繰り広げられていた。

さらに、感動だけに終わらせられないことも教えられ、そこに看護研究の力が期待されていることも実感した。私に研究の目的があるように、研究に参加する彼らにも目的や関心があり、自分そのものを資源にして貢献したがっていた。「足が悪い、手が悪いのと違って、心臓は見た目にわかんないから」「ほんとの辛さを社会の人にもわかってもらいたい」「これから的孩子たちが楽になれるよう役に立ちたい」と話した。それだけに「もっと聴きにくいこと聞いていいよ」と研究の本質に迫られ、「ちゃんとしたものに仕上げてよ」「発表してよ」と念を押された。私は参加者の研究に挑む思いやその尊さを覚えていくことで学修への心構えを新たにしていった。彼らも体験を構成して語ることで肯定感や自尊心を確認し、可能性を見出していた。

研究の協働は、参加者が持つ世界の暴露から始まり、その話しを私が聴いて解き明かす過程でお互いを刺激し合った。大学院の学修を基盤にした研究参加者の恵みは、私の看護の驕りを修正し、現象を理解しようとする感度を柔軟なものに切り替えた。今の私の探求は、現象をなぞり描くという初段階である。彼らが語る真実に根ざして翻訳し、そこで受ける恵みを意識して探求を続けていきたい。
